

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381166

研究課題名(和文) 小学校社会科における知識・技能の総合的な活用を目指す授業モデルの構築

研究課題名(英文) Construction of the class model aiming at the general inflection of knowledge and skill in elementary school social studies

研究代表者

溜池 善裕 (tameike, yoshihiro)

宇都宮大学・教育学部・教授

研究者番号：60260452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：小学校社会科における知識・技能の総合的な活用を目指す授業モデルは、学習指導：a) 自律的学習が出来るようになる、b) 具体的・構造的思考にする、c) 友達の学習を学習するようになる。授業：a) 具体的思考や構造的思考を高度に集団においてはたらかせる集団的学習の場、b) 集団的学習としての授業を相対化するための書く指導、陶冶：学級集団における道徳的実践性において知識の質やその活用を鍛えること、によって構成される。自律的な学習が高度な集団的思考の場としての授業、つまり「子どもがする授業」と一体となる個に閉じない学習モデルが、本研究が明らかにした授業モデルの要点である。

研究成果の概要(英文)：The class model aiming at the general inflection of knowledge and skill in elementary school social studies contains

1) learning instruction: a) for autonomous learning, b) for concrete and constructive thinking, c) for learning how to learn from classmate 2) in class: a) focusing on lesson as the collective learning, b) writing means to relativize their collective learning 3) moral: to raise the quality of the knowledge in moral practice characteristics in the class group

研究分野：社会科教育

キーワード：自律的学習 具体的思考 構造的思考 高度な集団的思考 道徳的実践性

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会的背景

指導要領改訂および、社会的要請において、小学校社会科における知識・技能の総合的な活用は重要な課題であった。

(2) 研究史的背景

従来の研究では、課題解決のための具体的方途は、求められる課題を解決する要素を含みこむ授業モデルを作り、それを実施して良い結果を出すものが大半であるが、そのような研究では子ども達が授業モデルの意図を読んだり、授業モデルによる具体的な刺激に直接反応したりすることによって得られる、短期的な好結果が良い結果に結びつくことが多く、問題をはらんでいた。

2. 研究の目的

(1) 長期的に意味のある授業モデル

子ども達が、授業モデルの意図を読むことなく、また授業モデルによる具体的な刺激への反応が短期的にとらえられて好結果を生むことのないよう、子ども達が自然に学習に打ち込み、集団で見出した問題を何とか解決しようと協働する、全身全霊を打ち込んだ学習において、知識・技能を総合的に活用しそれらを高度に発展させる授業モデルを構築することを目的とした。

(2) 臨床的なデータの分析

授業モデル構築に際しては、子ども達の学習の状況をその作文やノート、授業記録等を蓄積して分析する方法をとることで、子ども達に授業の意図や方法を意識させることなく、より自然な学習において、モデルの妥当性等が検討・考察されるようにした。

3. 研究の方法

公立小学校、高学年の学級における、小学校社会科の授業を記録・分析することを通して、授業モデルを構築し、それを実施し検証することを通して、当該授業モデルを構築した。

(1) 文献研究

研究のプロセスにおいて、本研究が対象とする授業モデルの原型が 1970 年代に「子どもがする授業」としてすでに存在していることが明らかになったため、文献研究をおこなった。

(2) 文献研究による知見と臨床的分析研究

上記「子どもがする授業」および『初等教育原理』を参照しつつ、公立小学校高学年の学級の授業を定期的に参観・記録し、小学校社会科において「子どもがする授業」を実施しつつ分析・考察を行ない、授業モデルを構築した。

(3) 授業モデルの妥当性の検討

上記授業モデルを実施しつつ、関連する基本的なデータ(子どもの作文、ノート、授業記録)を集積し、それを分析・考察することで、授業モデルの妥当性等を検証した。

4. 研究成果

(1) 文献研究の成果

1) 文献研究により、本研究が構築しようとした授業モデルは、既に 1970 年代我が国において、「子どもがする授業」として実施されていること、また、この授業は、小学校社会科創設時に直接それに関わった重松鷹泰と現場教師によって考えられ、その授業原理は『初等教育原理』(1970)に示されていることを明らかにした。この授業原理については、重松のその他の論考を補強し、関連する重松の業績を整理した。

2) 上記授業モデルはその後 70 年代後半まで、重松が関係する公立小学校等で実施され、またその授業記録が残っていたため、それらを収集して整理し、本研究の授業モデル構築のための参考とした。

(2) 授業モデル構築と妥当性の検討

『初等教育原理』に示された授業原理、および「子どもがする授業」実践を参照すると同時に、それらを援用して授業モデルを構築した。本授業モデルを長期的な学習指導において実施し、その分析を通してその妥当性を検討した。

(3) 構築した授業モデル

「小学校社会科における知識・技能の総合的な活用を目指す授業モデル」は、授業を「子どもがする授業」として集団的思考をはたらかせる協働的な学習として節目の授業に位置づけ、それまでに必要な学習を「学習指導」に位置付ける、構造的な授業モデルである。

したがって、子ども達が授業を受動的ではなく、自らの学習として意識し、それに主体的・積極的に取り組むことを通して、生活即学習、学習即生活となるような自律的学習を作る学習指導が不可欠である。また、このような学習指導を通して、集団的思考を働かせる授業を実施する際には、その授業のテーマ設定において、こたえを出すことは出来ないが子ども達がどうしても考えたい問題をあらかじめ想定し、学習指導の際にその問題に近づくようなはたらきかけをする必要がある。なお、本授業モデルにおける、学習指導、授業、陶冶(教育目的)の要件は以下の通りである。

学習指導：

a) 自律的学習が出来るようになる学習指導
本授業モデルにおいては、集団的思考をはたらかせる授業が、真の意味で子ども達の学習となっている必要があるが、そのためにはその授業までの学習において、子ども自らが問題を発見しそれを解決しようとする自律

的学習がなされている必要がある。したがって、教師は教えるばかりでなく、子ども達自らが学習しようとする事が出来るようになる学習指導を行わなければならない。

b) 具体的・構造的思考にする学習指導

上記、自律的学習の自律性とは、みずからが次々と問題を発見し、それを解決していこうとする構えである。この自律性は、思考が観念的である場合には成立しない。なぜなら、観念的思考はことがらを表面的・一面的に理解しているがゆえに、子ども達の知識の世界が完結し安定しているためである。それゆえ、観念的思考を、知識が不安定になり考えざるを得なくなる具体的思考に転換させる必要がある。学習指導の要の一つは、このような具体的思考を促す指導である。また具体的思考は、その重ね合わせ、つまり構造的思考にまで高められ、一面的に簡単に割り切らない構造的思考となることで、仲間の考えを大切にし、それを集団的な学習に生かすことが出来るようになることで、ようやく「子どもがする授業」は可能となるのであって、そのための学習指導がのぞまれる。

c) 友達の学習を学習するようになる学習指導（子ども相互がつながる学習指導）

子ども達の思考が具体的思考になると、学習対象のみならず、現実にもにいる仲間についても具体的思考をはたらかせることになる。そして、仲間の学習を学習すること、例えばすぐれて具体的な学習についてはその真似をしたり、その真似を通して学習の方法やものの見方を獲得・発展させることが、多くの子ども達において、つながりながら起こり、それによって子ども達が真の意味で集団として学習している状態となる。このような学習が起こるような学習指導、つまり個々の学習が集団に開示され、そこでの関係化がはかれる学習指導が求められる。

授業：

a) 具体的思考や構造的思考を高度に集団においてはたらかせる集団的学習の場としての設定

上記のような学習指導のもと、学習の節目に「子どもがする授業」である集団的な学習が行われる授業を設定する。この授業では、子ども達が学習して獲得した知識・技能が、集団的学習において十分に発揮されることが要求される。したがって、知識・技能を何の脈絡もなく披瀝したり、直接的に使うことは出来ず、集団的な学習の文脈において使うことが要求される。それゆえ、この授業で設定されるテーマは、子ども達の学習の延長線上にあって、どの子もそれを解決しようとするけれども、容易にこたえを出すことの出来ない問題である必要がある。

b) 集団的学習としての授業を相対化するための書く指導の徹底

a)のような授業となるためには、子ども達の思考が十分に鍛えられる必要があるが、そのためには子ども達に作文を書かせ、その作文を通して具体的、構造的に書く指導を授業とのつながりの中で行う必要がある。したがってそれは授業の振り返りでもあるが、従前の振り返りの指導が、どのような授業においても行われるのに対して、集団的な学習に向けた明確に位置付けられた授業において行われることに意義がある。なぜならば、そのような授業における振り返りは、集団の成員の個々の学習への関わり方や関係の仕方についてなされ、そのことを通して集団的な学習やそこにつながる自己の学習の在り方を問うことになるからである。そのため、振り返り指導においては、「誰」が何を言ったか、それについて「誰」がどのように意見を言ったりおたずねをしたかを具体的に書く指導と、それについて自分はどのように考えたか、またそれはなぜかについて書く指導が求められる。

陶冶（教育目的）：学級集団における道徳的实践性

以上のような授業モデルにおいて最終的に育てられるのは、知識・技能を持った上でそれを集団との関係において鍛えつつ、互いの良さを認めながら、高度な集団的な学習を実現する、道徳的实践性である。

(4) 総括

個々の子どもの自律的な学習が、高度な集団的思考の場としての授業と構造的につながる、つまり個に閉じない学習モデルが、本研究が明らかにした授業モデルの要点である。この授業モデルにおいては、知識や技能を獲得してもそれが集団的思考の場で試されたり鍛えられたりすることで、知識・技能が子ども自身のものとなるだけでなく、集団との関係を強く持った可塑性のあるものとなる。このことは、小学校社会科における本授業モデルが、民主的な知識・技能を要求し、したがって知識・技能を常に外に開く性質を持つがゆえに、小学校社会科の目的、すなわち公民的資質の基礎につながるものである。また、最終的に本モデルが目指す、子ども達が獲得する道徳的实践性は、教科道徳の目標にもつながるものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計15件)

1) 溜池善裕, 授業とは何をいうか: 社会科における「しみじみとする授業」の意義, 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 査読無, 36, 139-150, 2013-07-01

2)薄田大智・溜池善裕，一人学習における個性的思考，宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，査読無，36，151-162，2013-07-01

3)溜池善裕，授業とは何をいうか：「しみじみとする授業」の先にあるもの，宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，査読無，37，49-56，2014-07-01

4)薄田大智・溜池善裕，「個」と「集団」との関わりの中で育つ子ども，宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，査読無，37，57-64，2014-07-01

5)溜池善裕，授業とは何をいうか：発言のびき合い，宇都宮大学教育学部教育実践紀要(1)，査読無，43-50，2015-08

6)伊藤多輝子・溜池善裕，話し合い活動で育つ支え合うクラス，宇都宮大学教育学部教育実践紀要(1)，査読無，221-224，2015-08

7)溜池善裕，問題解決学習から「しみじみとする授業」へ(4)思考の感応・共存の感情，考える子ども(355)，査読無，8-13，2014-01

8)溜池善裕，問題解決学習から「しみじみとする授業」へ(5)学年的発達・共存の感情，考える子ども(356)，査読無，20-26，2014-03

9)溜池善裕，社会科教育における重松鷹泰の授業分析研究の意義：「子どもがする授業」の発見と追究に着目して，社会科教育研究 The Journal of social studies (121)，査読有，28-39，2014

10)溜池善裕，問題解決学習から「しみじみとする授業」へ(6)学年的発達・共存の感情(承前)，考える子ども(358)，査読無，21-27，2014-07

11)溜池善裕，問題解決学習から「しみじみとする授業」へ(7)個性的思考，考える子ども(361)，査読無，11-16，2014-11

12)溜池善裕，問題解決学習から「しみじみとする授業」へ(8)個性的思考(承前)，考える子ども(364)，40-44，2015-05

13)溜池善裕，問題解決学習から「しみじみとする授業」へ(9)個性的思考(承前)，考える子ども(365)，査読無，20-23，2015-07

14)溜池善裕，問題解決学習から「しみじみとする授業」へ(10)個性的思考(承前)，査読無，考える子ども(367)，40-45，2015-09

15)溜池善裕，問題解決学習から「しみじみとする授業」へ(11)個性的思考(承前)，考える子ども(368)，査読無，44-52，2015-11[学会発表]

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者
溜池 善裕 (TAMEIKE, Yoshihiro)
宇都宮大学・教育学部・教授
研究者番号：60260452

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

以上